

成果の説明書

(氏名) 岡村晃子	(学部) 経済
1 重要事項 2018 年度は 1 年生英語必修科目で昨年度の Dictation テストにさらに Recitation テストを加えて、これらのテスト結果と学生の意欲を含めた授業への取り組みの関係を調査した(科研基盤研究 C)。本年度は、前年同様 Dictation テスト結果が後期になって伸びている学生は英語を話すことを楽しんでいるということで、学習する努力は楽しむという要素が必要なのことが確認されたといえる。本年度さらにわかってきた興味深い点は Recitation テストを加えることで学生全体の前期と後期の Dictation テスト結果の平均点が上がっていることである。これは聞くことと話すことは同時に伸びるということまた同時に扱うべきである点を示唆している 昨年から再度研究を復活させた呼称に研究は、2018 年度は呼称の選択が、話す状況、話し手の性別、話し手の上下関係がどのように影響しているか歴史的視点に立って調べている。本年度は大学の競争的研究費受領でより広がりを見せた。それは、銀行職員、また日本人大学生と台湾人大学生の母語における呼称の使い方について新たなデータを得た点である。結果として今の段階で分かってきたことは以下の点である。まず、日本語の呼称は昨年のデータ同様に、Informal な状況で同級生の場合男女の呼称は名前の呼び捨てが増えている点の確認され、中国語でも同じような結果であった。親しい間柄では男女の境が無くなっている結果である。それに対して日本語では Formal な状況では男女上下に関係なく苗字+「さん」の利用が増えていることが確認された。これに対して中国語では、Formal な場合は「さん」のように男女共通の敬称がないため男女で呼称に差がみられた。しかし同じ流れが中国語でも予想できるとすると、男女の呼称に差をなくすために新たな動きがみられるかもしれない。 口頭発表 Akiko Okamura (2018a). Motivation, <i>Flow</i> and the improvement of English speaking skills in university task-based English classes. Second Language Research Forum, Montreal, Canada. Akiko Okamura (2018b). Improving speaking skills in university task-based English classes: positive emotions, extra work and type of motivation, 2nd conference on Language education and testing, Antwerp, Belgium. 外部資金獲得 科学研究費 基盤研究 C 2017 - 2019 Dictation と Recitation 融合による発音力を伸ばす教授方法の確立	
2 その他の事項 Journal of English for Specific Purposes の査読者としての貢献	
3 次年度以降の計画・抱負 来年度は本年度(2018)までに分かってきた Dictation と Recitation の導入の結果をまとめたと思う。これは 2019 年度は一年間在外研究となり授業でさらに Dictation と Recitation を生かした発音向上への扱いができないためである。そのため、再来年度に、Recitation テスト用の練習に音声の聞き、覚え方を phrase ごとの意味のまとまりでリズ	

も考慮して覚える練習を取り入れたい。そしてこの取り組みが **Recitation** をより覚えやすくなっているか調査したいと思う。

また、呼称、今まで続けてきた学術論文分析についても、まとめ的な研究へとつなげていきたい。